

近畿部会準備会最近の動向からひとこと・ふたこと

金山正子

近畿圏での歴史資料の保存に関する関心は、関係機関のみならず地方自治体及び担当者間で高まってきています。準備会での活動も1992年7月で4年度目に入り、長すぎた春にならない様にと、近畿2府4県及び市町村へ積極的な働きかけが進められています。

それとともに、今年度の活動は今までになかった会員の自主的な動きが盛り上がっています。具体的な活動内容としては、従来回を重ねてき隔月の研究会を続けていくとともに、会員間で実務上の課題を検討していける分科会を自主的な会合として呼び掛けていこうという提案があり、6月から読書会・公文書研究会・マイクロ研究会の3つの分科会が、8月から史料保存のあり方を考える研究会がスタートしました。

いずれも、だいたい月1回のペースで進めていきたいということで、多少本音を言いますと「チョット乱立しすぎるじゃないの～」という気がしないのではないのですが、そこは皆さん関西人の本領を発揮してAfter 5も禁欲的に熱心に研究会に参加しています。当初は準備会が分散してしまうのではないかと危惧する意見もありましたが、今まで会に参加できなかった人たちも参加しやすい基盤をつくるという発想で、テーマ分科会をスタートさせました。

これらの分科会の活動内容及び日程案内は、随時に準備会ニュースや単独の案内で会員の方々

にはお知らせしています。毎回すべての分科会には参加できない方でも、その情報は共有できる様な形を、また各研究会での蓄積を残せる様な形も今後考えていきたいと思えます。

そのほか最近の活動としては、5月21日に開催した大阪府公文書館との共催による講演会には、参加者202名という反響がありました。

〔テーマは「公文書・資料類の保存・管理に関する講演会」、講師は山中永之佑氏（追手門学院大学教授・大阪大学名誉教授）・芝村篤樹氏（桃山学院大学助教授）〕

参加者は一般行政職の方と歴史資料取扱いの担当者がほぼ半々の割合で、講演会の内容が日本における情報公開制度と文書館の関係に触れていた点もあり、アンケートでの参加者の感想を見ると、それぞれの立場での見解にも特徴があらわれていた様です。これは私個人の触感ですが、一般行政職の方の場合は、やはり情報公開に係わる文書管理の実務的なことに関心が集中しており、歴史資料取扱い担当者の場合、必ずしも情報公開とのからみに焦点はなく、歴史を伝えるものとして史料を保存していくことそのものを考えたいというニュアンスを感じます。

情報公開と文書館運営は、いずれも住民の立場からの要求に応えるべきものであるとは思いますが、日本における両者のからみ具合が、あまりにも行政的の不自然さをともなっている様に

思えます。そのへんにすっきりとした線引きとそれぞれの視点を明確にしていく必要があるのではないのでしょうか。

また、「地域住民へのPRをもっと積極的にすべき」という意見は、一般行政職の方々から多くありました。これは、文書館の運営を考えていく上で、今最もネックとなっている問題の一つであると思いますが、住民の側にもっと関心を持ってもらうにはどうすればいいのかということは、確かにもっと現実問題として考えていくべき時期にきていると思います。なにより、

「見たいものが見れる」「知りたいことが探れるモトがある」というのが、住民の知的欲求を満足させる前提ですから、その点がまだまだ不備な文書館では、そこを前提として行政的に話を進められると弱い。もっと先を見て、今どうすべきかを考えていきたいものです。

〔なお、講演会の内容に関しては「準備会ニュースNo.8」にまとめています。また詳細は大阪府公文書館「あーかいぶす特集号No.3」(1992年度発行予定)に掲載予定です。〕

(大阪府公文書館)